自由言語連想調査による初年次生の大学生と所属大学に対するイメージの考察

中　植　正　剛

Freshmen's Image of Their University and College Student according to a Word Association Survey.

Masataka NAKAUE

要　旨

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科の初年次生48名を対象に自由言語連想課題を実施して，「大学生」および所属大学である「神戸親和女子大学」という刺激語に対してどのようなイメージを有しているのかを調査した。KJ法を用いて分類したところ，前者は10，後者は11の分類が形成された。三週間のインターバルをおいて連想語の総数の増加は有意であった。「大学生」については語数，語の種類数ともに増加した一方で，「神戸親和女子大学」については語数のみ増加し，語の種類数にはそれほど変化がなかった。「大学生」については，ライフスタイルや人物像についての連想語が増加しており，実際に大学生活を送り，先輩や同級生などの大学生に触れることによって，具体的な大学生像が形成されはじめていることが確認できた。所属大学である「神戸親和女子大学」については，環境やカリキュラムについての連想語が増加しており，大学の周辺環境や学内の施設，通学の様子などが所属大学に対するイメージの形成に関連していることがわかった。二度の調査のインターバルの時期に実施された宿泊型オリエンテーションである親和行事の所属大学のイメージに与える影響については，それほど大きくはなかったが，行事直後のアンケートで，行事によって学科の印象が変化したと回答した学生数が学科全体の半数弱存在した。

キーワード：初年次教育，初年次体験，高等教育，言語連想

1. はじめに

近年，高等教育において質の高いカリキュラムを実施するにあたって着目されているのが，初年次教育である。初年次教育とは，大学初年次に実施する教育全般を指す広い概念であり，その定義はさまざまである。初年次教育先進国の米国ではFirst Year Experienceと言われ，初年次生対象のオリエンテーションや寮生活の支援など，いわゆる初年次の演習や共通教育科目といった授業科目以外の幅広い教育活動が初年次教育に含まれている。川島（2008）は，「大学における自律的な

学びや活動のための基盤づくり」という共通項を指摘しつつ，「初年次教育は，大学教育や学生生活への円滑な移行を支援するための，大学の組織的・計画的な取り組みに基づいた初年次学生（一年生）に対する教育活動に他ならない」と述べている。このような基盤づくりにおいては，学習適応（Academic Integration）と社会適応（Social Integration）の両面からの支援を実施してゆかなければならない。

本稿は，主に社会適応に着目して研究をすすめた。学習適応については，レポートの書き方やディスカションの技法などのスタディスキルズ，情報リテラシー，専門教育への導入となる基礎的知識や技能の教育などが含まれるが，社会適応については，学生生活における健康の維持といったスチューデントスキルや，キャリアデザインなどが含まれている。

社会適応について，初年次生がどのように所属大学に適応し，どのように大学生としてのアイデンティティを身につけていくのかを模索することを念頭において，本稿では，初年次生が，大学生というものについてどのようなイメージを抱いているのか，また，所属大学についてどのようなイメージを抱いているのか，そして，そのイメージが，本学の初年次教育の一環である宿泊型オリエンテーションの親和行事を境にどのように変容するのかを検討する。本稿の目指すところは，大学への帰属意識やアイデンティティ，メンバーシップを育むためにどのような支援が有効なのか，また，初年次教育の質の向上に向けてどのような取り組みが可能であるのかを検討するための基礎的な情報を提供することにある。

2. 目　的

大学入学後一カ月が経過した時点における三週間の期間中に，初年次生の大学生観と所属大学に対するイメージがどのように変化するのかを明らかにするとともに，宿泊型オリエンテーション（親和行事）がそのイメージになんらかの影響を与えるのかどうかを明らかにすることで，初年次教育の質の向上を目的としたさまざまな取り組みに対して有用な知見を得る。

3. 方　法

3.1. 対象・期間

本学発達教育学部児童教育学科の初年次生48名を対象にして自由言語連想を実施した。期間は2012年5月2日に第一回目，2012年5月23日に第二回目の調査を実施したが，第二回目は一名が欠席したため，47名の調査データが得られた。第一回目と第二回目の調査のインターバルである2012年5月11日，12日の両日，初年次生向けの宿泊型オリエンテーションである親和行事が実施された。親和行事の二日目終了時に，所属学科に対する印象に変化があったかどうかを，238名にアンケートで尋ねた。

3.2. 調査内容と実施方法

自由言語連想法を用いて記名式（学生番号，氏名）の調査を行った。刺激語は「大学生」「神戸親和女子大学」の2語として，それぞれの刺激語について，2分間でできるだけ多くの連想語を書かせた。教示の際には，文章ではなく単語を書くこと，不正解や正解はないので2分間でできるだけたくさん書くことを，教示用のスライドを投影して伝えるとともに，連想語を書くためのワークシートの使い方を説明した。第一回目調査では「バナナ」，第二回目調査では「みかん」という刺激語を用いて練習問題を一題実施し，調査方法についての被調査者の理解を確認した。刺激語は一語ずつ個別のスライドに記載して投影し，開始時に調査者が読みあげた。

3.3 分析方法

自由言語連想については，連想語の産出語数と種類数を集計するとともに，KJ法を援用して連想語の分類を行った。

連想語として産出された語について，「自由」

「自由な」のような品詞のゆらぎが見られたので，名詞であっても，形容詞あるいは副詞として解釈できる語，つまり何かの様態を表す語については，可能な限り形容詞あるいは副詞に語を変換してカウントした。例えば，先の例であれば「自由」という名詞を「自由な」として形容詞化した。形容詞化・副詞化できるかどうかについての判断は，研究協力者2名が辞書を参照しながら，形容詞化・副詞化できる場合は積極的に変換するという規準で判断した。研究協力者は個別に作業を行い，両者の判断が一致したものについてはそれを採用した。一致しなかったものについては，研究協力者2名と筆者で最終的な一致率が100%になるまで検討をした。形容詞化した語の例としては「アットホーム」→「アットホームな」，「おしゃれ」→「おしゃれな」，「はなやか」→「はなやかな」が挙げられる。形容詞の連想語については肯定的・中立・否定的の3種類に分類をして集計をした。

つぎに，産出された連想語について，KJ法を援用した二段階の分類を行った。まず，1回目の調査データを用いて，関連のある連想語をグループ化して小分類を形成し（一段目），形成した分類に属する連想語の共通点を表す名称を付与するとともに，各分類の定義を記述した。さらに，関連のある小分類同士をグループ化して大分類を形成し（二段目），その大分類に含まれる小分類と連想語に共通する事項を考慮しながら，それぞれの大分類にふさわしい名称を付与するとともに，各大分類の定義を記述した。KJ法をベースにしているので，分類のための概念を事前に想定するのではなく，分類された連想語同士の関連性に密着しながらボトムアップで概念を形成した。分類の形成が完了したところで，各連想語が小分類と大分類に適切に分類されているかどうかを再度検討した。特に，複数の分類に含まれうる連想語については，被調査者の回答の意図を分類の名称や定義と照らしあわせて，より強くあてはまるほうに分類されているかどうかを確認した。例えば，「幼稚園教諭」という連想語は，「性別や身分などを表す連想語群」である「人物属性」という分類に分類されうるが，それよりも「将来の進路に関する連想語群」である「進路」という分類のほうが被調査者の意図により近いと判断できたので，この連想語は「人物属性」ではなく「進路」に分類するほうが妥当であると判断した。この判断は3名の研究協力者によって行い，判断が一致しなかったものについては100%の一致率になるまで話し合いによって検討をした。

2回目の調査データについては，1回目の分類を用いて連想語を分類しながら，必要に応じて新しい分類を形成した。さらに，2回目に形成された新しい分類を1回目の連想語に適用して1回目の分類を微修正した。これによって，1回目の調査については，連想語が1語しか含まれないような分類も新たに作成されたが，1回目と2回目の分類結果が比較可能となった。

以上のように形成した各小分類・大分類について，1回目と2回目の調査でどのように連想語の傾向が変化をしたのかを分析した。

4. 結果と考察

4.1. 連想語総産出数と連想語種類数の変化

それぞれの刺激語に対する連想語の産出数について表1に示す。

表1　各刺激語に対する連想語産出数と連想語種類数

	1回目調査	2回目調査
大学生		
連想語数	572	694
平均	11.92	14.77
標準偏差	5.05	5.88
連想語種類	172	214
神戸親和女子大学		
連想語数	574	721
平均	11.96	15.34
標準偏差	5.31	6.32
連想語種類	182	193

(n=47)

「大学生」を刺激語としたときの連想語の総数は1回目の調査で572語，2回目の調査では694語であり，約21.3%増加した。各調査の連想語数の平均は1回目が11.92語，2回目が14.77語で，一人あたり2.85語の増加であった。対応のあるt検定の結果，t（46）＝6.01，p<.01で有意であった。「神戸親和女子大学」を刺激語としたときの連想語の総数は1回目の調査で574語，2回目の調査で721語であり，約25.6%増加した。各調査における連想語数の平均は1回目が11.96語，2回目が15.34語で，一人当たり3.38語の増加であった。t検定の結果，t（46）＝6.53，p<.01で有意であった。それぞれの刺激語について，20～25%の増加が3週間という短期間で確認できたことで，本学児童教育学科に所属する初年次生については，入学1カ月の時点において，大学生や所属大学についてのイメージが大きく膨らむということがわかった。

一方，産出された連想語の種類については，「大学生」に対する連想語が1回目の172種類から2回目には214種類に増加しているが，これは約24.4%の増加であり，「大学生」に対する被調査者のイメージが広がったことが確認できる。また，刺激語「神戸親和女子大学」については，1回目の182種類から2回目には193種類に増加しており，約6.04%の微増であった。「大学生」と比較して「神戸親和女子大学」に対する連想語の種類はそれほど増加しておらず，イメージが広がったとはいえない。それにもかかわらず，連想語の総数が25%以上増加していることを考えると，「神戸親和女子大学」については，イメージに広がりが出たのではなく，大学に対する共通したイメージが多くの初年次生に浸透するという変化があったのではないかと考えられる。

4.2. 品詞の内訳と形容詞連想語における肯定感の傾向

刺激語「大学生」「神戸親和女子大学」に対する連想語を品詞別に集計したものを表2に示す。

各刺激語につき，産出数が少なかった副詞・動詞を除く名詞・形容詞について，1回目と2回目の品詞の割合の違いは有意ではなかった。（「大学生」（$\chi^2(1)=2.07$，$p=.15$），「神戸親和女子大学」（$\chi^2(1)=.83$，$p=.36$）。この時期の初年次生にとって，「大学生」や所属する大学に対する印象としては，モノ・事や人に関する印象が約8割，形容詞的な表象に関する印象が約2割の割合で形成されている。

次に，刺激語「神戸親和女子大学」に対する形容詞連想語について，肯定感に関する連想語の分類は表3，各分類に対する連想語数の内訳は表4のとおりであった。

表2　連想語　品詞別連想語数

	名　詞	形容詞	副　詞	動　詞
大学生1回目	447（78.1%）	119（20.8%）	0（0.0%）	6（1.0%）
大学生2回目	559（80.5%）	121（17.4%）	1（0.1%）	13（1.9%）
神戸親和女子大学1回目	440（76.7%）	130（22.6%）	2（0.3%）	2（0.3%）
神戸親和女子大学2回目	567（78.6%）	148（20.5%）	1（0.1%）	5（0.6%）

表3　「神戸親和女子大学」に対する形容詞連想語の分類

	1回目調査	2回目調査
肯定的	アットホームな，楽しい，きれい，明るい，やさしい，笑顔，あたたかい，おしゃれな，かわいい，元気な，まじめな，自由な，仲よし・仲いい，はなやかな，おもしろい，かしこい，親切な，熱心な，フレンドリーな，おだやかな，落ち着く，すごしやすい，親身な，ほのぼのとした，平和な	楽しい，きれい，やさしい，アットホームな，明るい，自由な，かわいい，おもしろい，元気な，おしゃれな，強い，あたたかい，かしこい，親切な，すずしい，熱心な，まじめな，おだやかな，素直な，すてきな，はなやかな，フレンドリーな，安い，有名な
中　立	小さい，小規模な，静かな，近い，多い，大きい，遠い，厳しい，個性的な，素朴な，たくさんな，ユニークな	小さい，　小規模な，少ない，遠い，暑い，寒い，おとなしい，個性的な，庶民的な，近い，長い
否定的	せまい，汚い，暗い，しんどい，つらい，めんどくさい	せまい

表4　「神戸親和女子大学」に対する形容詞連想語の傾向

	1回目調査			2回目調査		
	種類数	産出数	割　合	種類数	産出数	割　合
肯定的	25	97	76.1%	27	116	78.4%
中　立	12	25	18.1%	10	24	12.8%
否定的	6	8	5.8%	1	8	8.8%

1回目，2回目ともに肯定的な反応が75%を越えており，逆に，否定的なイメージは9%未満であった。被調査者の学生については所属大学に対しておおむね肯定的なイメージを有していることがわかる。調査期間中の変化について確認するためにχ^2分析をしたが，有意ではなかった($\chi^2(2)=.552$，$p=.76$)。調査期間において，「神戸親和女子大学」に対するイメージの肯定感に関する傾向が変化したとは言えない。

4.3. 分類結果

4.3.1. 刺激語　「大学生」の分類

刺激語「大学生」の調査結果で得られた連想語の分類を表5に示し，1回目，2回目調査の大分類・小分類別の連想語数の結果を表6，図1，図2に示す。

表5　刺激語「大学生」に対する連想語の分類

	分類の定義 含まれる小分類 連想語の例
自己形成	成人や社会人としての自立を示す連想語群。職業や進路は含まない。
	成人，社会的自立，自己実現，
	大人，20歳，責任，独立
キャリア形成	キャリアの形成に関する連想語群。
	資格，進路，就職，大学受験
	TOEIC，資格，教師，社会人，受験
カリキュラム	課外活動を含む広義の教育課程とそこでの学習体験。教育の結果として表される免許や資格，進路に関する連想語群
	教学，単位取得，課外活動，休暇，学習活動
	学園祭，実習，レポート，講義，夏休み，勉強
アイテム	持ち物や服飾品を示す連想語群
	服飾，文房具
	メガネ，アクセサリー，ピアス，ルーズリーフ，教科書，パソコン
ライフスタイル	暮らし方，交際，移動など，生活のあり方に関する連想語群
	生活，レクリエーション，家族交友交際，通学手段
	一人暮らし，バイト，自炊，原付，寮，下宿
物理的・社会的環境	学生を取りまく環境のうち，建物や組織などの物理的・社会的な環境に関係する連想語群
	学内環境，形態，大学組織
	学食，図書館，学科，
心理的環境	学生を取り巻く環境についての心象に関係する連想語群
	居心地，困難さ
	楽しい，フレンドリー，忙しい
人物像	人物の外面の様子や性質に関する連想語群
	人物の外面，人物像
	笑顔，おしゃれな，若い，かしこい，まじめな
一般的イメージ	上記にあてはまらない，大学生にたいする一般的な印象を示す連想語群
	一般的イメージ，男女
	青春
その他	その他の連想語群
	その他
	白い，字，心，年齢層

表6　刺激語「大学生」に対する連想語数

		小　分　類		大　分　類	
大　分　類	小　分　類	1回目	2回目	1回目	2回目
自己形成	成　人	33	35	58	73
	社会的自立	15	20		
	自己実現	10	18		
キャリア形成	資　格	12	12	34	36
	進　路	5	5		
	就　職	14	14		
	大学受験	3	5		
カリキュラム	教　学	67	67	149	156
	課外活動	51	54		
	休　暇	3	5		
	学習活動	28	30		
アイテム	服　飾	54	41	61	52
	文房具	7	11		
ライフスタイル	生　活	49	80	102	148
	レクリエーション	35	40		
	家族交友交際	10	17		
	通学手段	8	11		
物理的・社会的環境	学内環境	18	28	31	57
	形　態	5	22		
	大学組織	8	7		
心理的環境	居心地	60	56	70	62
	困難さ	10	6		
人物像	人物の外面	23	40	43	66
	人物像	20	26		
一般的イメージ	一般的イメージ	15	6	23	27
	男　女	8	9		
	場　所	0	4		
	学校一般	0	8		
その他	その他	1	18	1	18
	合　計	572	695	572	695

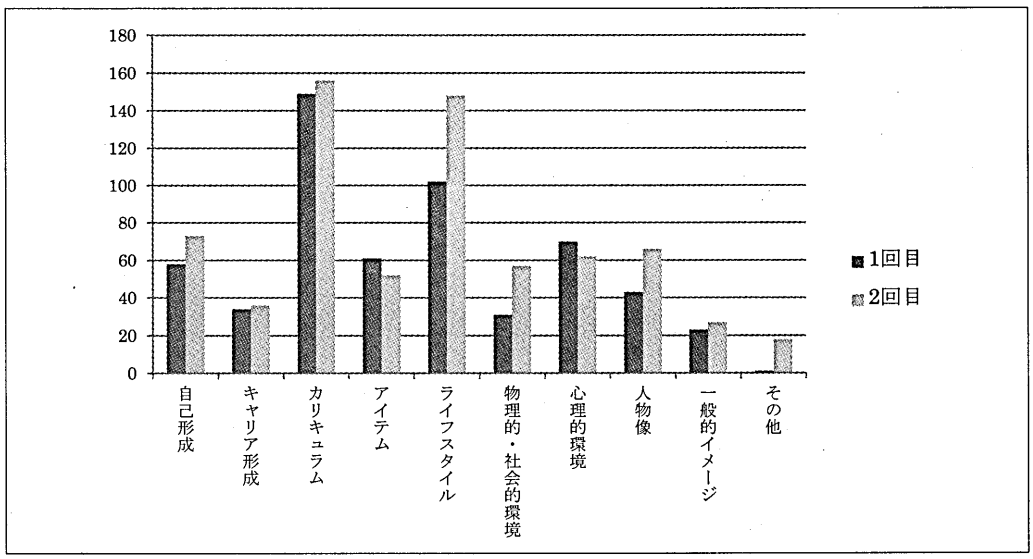

図１　刺激語「大学生」に対する連想語数（大分類）

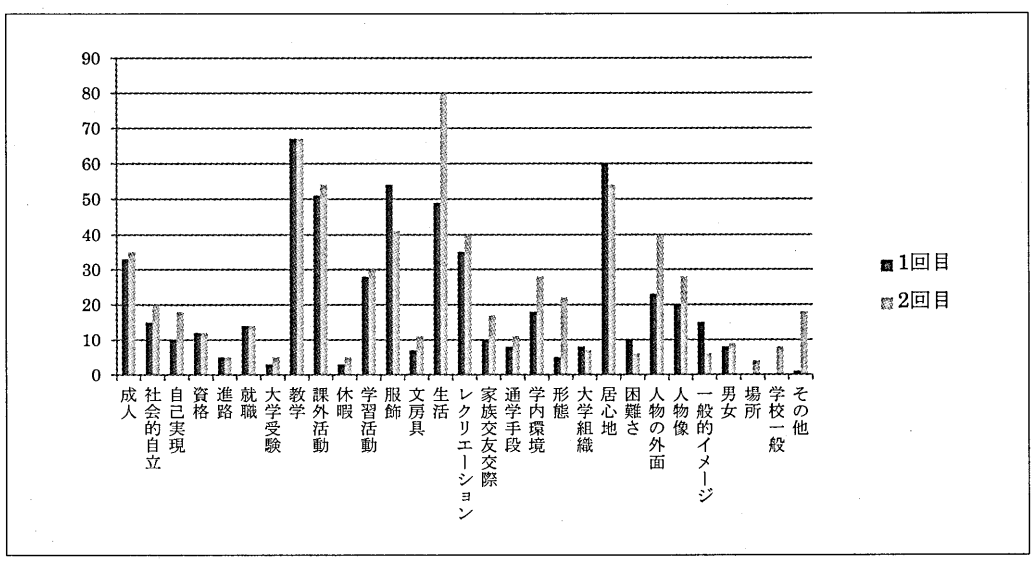

図２　刺激語「大学生」に対する連想語数（小分類）

大分類については，全体的な傾向に大きな変化はみられないが，ライフスタイルに分類される語に増加がみられる。ライフスタイルに包括される小分類では，生活に関する連想語が大幅に増えており，この時期の新入生にとっては，新しい生活に関するイメージが多様化しながらふくらんでいることがわかる。また，人物像についての連想語も増えている。入学後１カ月の時点で，実際に大学生に触れることによって，大学生の人物像が具体的にイメージできるようになったということではなかろうか。自己形成やカリキュラムについての連想語も微増しているが，対照的に，居心地や困難さなどの心理的環境についての連想語は減少している。

4.3.2. 刺激語 「神戸親和女子大学」の分類

刺激語「神戸親和女子大学」の調査結果で得られた連想語の分類を表7に，1回目，2回目調査の連想語数の結果を表8，図3，図4に示す。

表7　刺激語「神戸親和女子大学」に対する連想語の分類

大　分　類	大分類の定義 含まれる小分類 連想語の例
環　境	大学生活をおくるうえでの社会的基盤・インフラストラクチャに関する連想語群
	周辺環境・立地，学内環境・施設，規模，通学手段・距離，学内の食事
	鈴蘭台，ラウンジ，ピアノ・ピアノ室，バス，クレープ，学食・食堂
カリキュラム	課外活動を含む広義の教育課程とそこでの学習体験。教育の結果として表される習得される免許や資格、進路に関する連想語群
	進路，課外活動，教学，免許資格，学習活動，単位取得
	小学校教諭，ゼミ，保育士，勉強，英語，親和祭，ボランティア，レポート
居場所感	所属する共同体や人間関係に対する心理的感覚の表象に関する連想語群
	居心地，人間関係，困難さ，明暗イメージ，清潔感
	アットホームな，あたたかい，活気，仲よし・仲いい，厳しい
校　種	学校種に関する連想語群
	校種
	女子大・女子大学，学校，高校
人物像	人物のありようを表現する連想語群。
	人物像
	すてきな，かわいい，はなやかな，熱心な，親切な，熱心な
人物属性	性別や身分などの属性を表す連想語群
	人物属性一般，人物属性大学
	子ども・児童，先生，学生，先輩，友人・友達，リーダー
広　報	大学広報で扱われている語に関する連想語群
	広報
	1位，採用率，生かす
気　候	季節や天候に関する連想語群
	季節，天候
	花，桜，チューリップ，急な雨，強風
組　織	大学の部局や所属する（した）関係者に関する連想語群
	大学関係者，大学部局
	児童教育学科，教育学部，ガードマン・警備員，A先生
生　活	学生の大学外における私生活に関する連想語群
	生活
	一人暮らし，アルバイト
その他	－
	－
	連携，伝統，深い，ピンク

表 8　刺激語「神戸親和女子大学」に対する連想語数

		小　分　類		大　分　類	
大　分　類	小　分　類	1回目	2回目	1回目	2回目
環　境	周辺環境・立地	65	109	151	238
	学内環境・施設	48	64		
	規　模	18	23		
	通学手段・距離	18	34		
	学内の食事	2	8		
カリキュラム	進　路	61	62	141	194
	課外活動	47	58		
	教　学	14	42		
	免許資格	12	12		
	学習活動	5	14		
	単位取得	2	6		
居場所感	居心地	43	47	87	79
	人間関係	13	10		
	困難さ	5	0		
	一般的イメージ	14	8		
	清潔感	12	14		
校　種	校　種	15	14	15	14
人物像	人物像	43	51	43	51
人物属性	人物属性一般	36	42	68	84
	人物属性大学	32	42		
広　報	広　報	19	18	19	18
気　候	季　節	22	15	27	15
	天　候	5	0		
組　織	大学関係者	3	3	10	13
	大学部局	7	10		
生　活	生　活	1	6	1	6
その他	その他	12	9	12	9

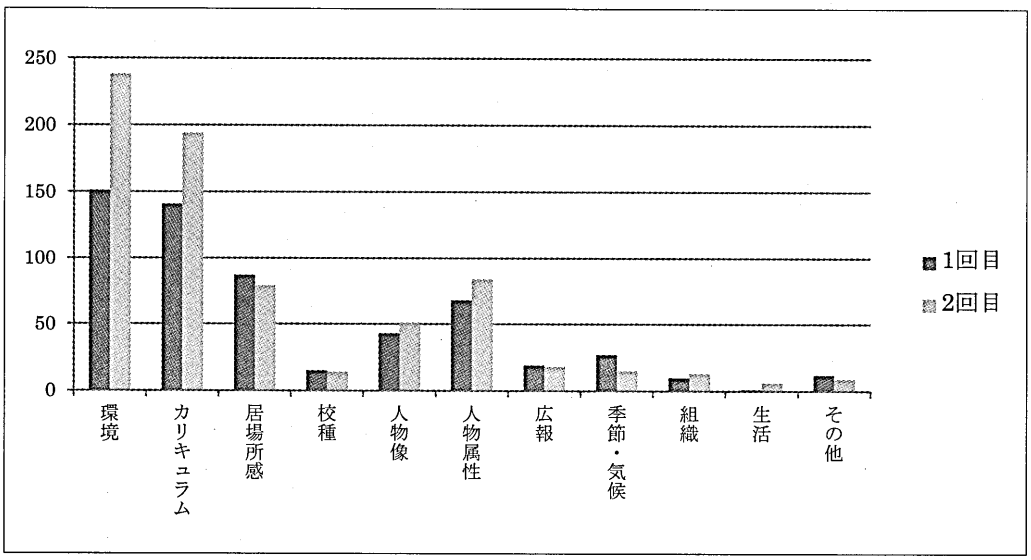

図３　刺激語「神戸親和女子大学」に対する連想語数の変化（大分類）

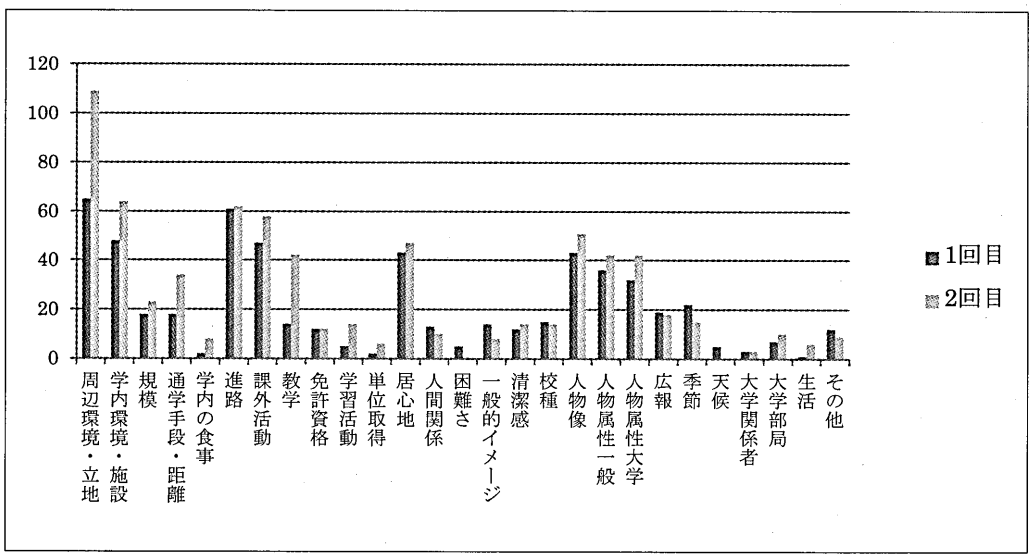

図４　刺激語「神戸親和女子大学」に対する連想語数の変化（小分類）

大分類「環境」には初年次生が大学生活をおくるために必要な社会的インフラに関する連想語が含まれており，５つの小分類で構成されている。１回目の調査で「環境」に含まれる連想語数は151語であり，これは全体の26.3%と，４分の１以上を占めている。また，２回目の調査でも238語であり，これは全体の33.0%で，約３分の１を占めている。この時期の初年次生にとって，新しく学業をする場である大学のキャンパス内の環境や大学周辺の立地環境が大きな関心事であることがわかる。特に，周辺環境や立地についての言及が二度の調査間で大幅に伸びており，これは学内環境と比較しても大きい。学内環境については，本学の教育施設である子育て支援センター「すく

すく」を挙げた回答が多かった（1回目24，2回目19)。本学では，入試広報のオープンキャンパスや大学案内で当該施設の広報を重点的に行っているため，その影響によるものだと思われる。「すくすく」は2回目の連想語数のほうが少なくなっており，大学広報によるイメージについては，大学生活一ヶ月目あたりで減衰していくのではないかと考えられる。一方で，学生ラウンジ（1回目3，2回目8）やピアノ練習室（1回目7，2回目12）のように，学生活動で日常よく使用する施設への言及が増えつつある。調査期間は，実際の学生生活を送ることで，所属大学についてのより具体的なイメージの構築が始まる時期にあたるのかもしれない。

大分類「カリキュラム」には，大学四年間の学習過程に関する連想語が含まれているが，このカテゴリーは，学生要覧に掲載されている各科目に関するものだけなく，部活動やボランティアなどの課外活動に関する連想語も含んでおり，本学が提供している広義の教育カリキュラム全般をさすカテゴリーである。また，学習過程の結果として取得される免許や資格，進路に関する連想語もこのカテゴリーに含んでいる。「カリキュラム」には教育課程と学習体験に関する連想語が分類され，6つの小分類を包含している。連想語数は141語から194語と，37.6%の増加であった。特に，教学に関する連想については14語から42語に増加しており，語の種類も9種類から14種類に増えていた。

大分類「居場所感」については，87語から62語へと減少しているが，これは小分類の「困難さ」や「一般的イメージ」が減少したり，「人間関係」が微減したりしたためである。逆に，「居心地」については微増している。入学後一ヶ月の時点で，困難や人間関係に対する不安が減り，大学生活になじみ始めたと言えるかもしれない。

4.3.3. 親和行事の影響

親和行事の影響については，刺激語「神戸親和女子大学」に対して，「親和行事」という語が行事前には全く見られなかったのに対して，行事参加後には7語の連想がみられた。また，行事に関連した「リーダー」という語が1語，「先輩」が1語であった。全体の語数からみるとそれほど多い連想数ではないが，47名という調査対象者数を考慮すると，本学についてのイメージ形成において影響力がないとはいいきれない。なお，親和行事に際して実施したアンケート調査の結果は次のとおりであった。

表9　親和行事に参加して、児童教育学科の印象は変わりましたか

は　い	どちらともいえない	いいえ	無回答	計
111	87	28	11	238
46%	36%	11%	4%	100%

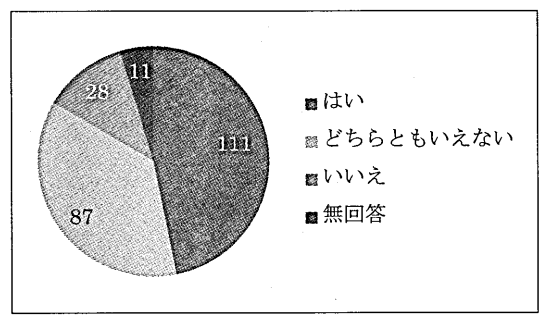

図5　親和行事に参加して、児童教育学科の印象は変わりましたか

5. まとめと考察

本研究では，自由言語連想を用いることで，入学後一カ月の時点における初年次生の，大学生と所属大学についての印象とその変化を調査した。KJ法により，「大学生」については10，「神戸親和女子大学」については11の大分類が形成された。

この時期の学生は，「大学生」や所属大学である「神戸親和女子大学」に対する連想語数が大幅に増えており，それぞれに対する印象が大きく変化する時期であるが，その変化のしかたには違いがあった。「大学生」については，連想語の種類

の増加によって，印象の広がりが確認された。一方で，所属大学である「神戸親和女子大学」については，印象が広がったのではなく，大学に対する共通する印象が初年次生に浸透するという変化であった。大学生という一般的な概念については自らの生活体験が積み重なることでより広く捉えることができるようになった一方で，この時期の初年次生において，所属大学について共通した印象が共有されるということは，所属大学の校風というものが初年次生たちの集団において継承され始めたということではなかろうか。

形容詞連想語は，１回目の調査，２回目の調査ともにおおむね肯定的・中立的な語で占められており，本学の児童教育学科において，初年次生は所属大学に対して肯定的なイメージを有していた。また，この時期，肯定的・中立・否定的な語の割合は大きく変化しないことがわかった。

分類別では，「大学生」については，生活を中心としたライフスタイルや人物像についての連想語が増加しており，実際に大学生活を送り，先輩や同級生などの大学生に触れることによって，具体的な大学生像が形成されはじめていることが確認された。所属大学である「神戸親和女子大学」については，環境やカリキュラムについての連想語が増加しており，大学の周辺環境や学内の施設，通学の様子などが所属大学に対するイメージの形成に関連していることがわかった。また，カリキュラムについては，教学や学習活動などに関する連想語を中心に増加しており，学問の場としてのイメージが形成されていく様子が確認できる。これは「大学生」についてのイメージとは異なるイメージの形成過程である。

宿泊型オリエンテーションである親和行事の影響については，関連する連想語の多少の産出はみられたものの，大きな影響があるものではなかった。ただし，アンケートによる調査では，回答者の半数弱の初年次生が所属学科の印象が変わったと答えている。つまり，親和行事は，所属学科の印象を変えるきっかけになっているものの，所属大学についての印象形成の全体的な構造においては局地的な影響にとどまっていると言える。

本研究の課題として，単一の学科でしか調査をしていないことや，調査期間が短期間であったことがあげられる。後者については，継続的に調査をすることによって，中長期にわたるイメージの変化の様子が確認できるであろう。そのような変化を明らかにすることで，在学中の多様な時点において，大学生活や所属大学のどのような位相に在学生が着目しているのかを明らかにすることができるのではなかろうか。

参考文献一覧

濱名　篤（2008）．初年次教育の必要性と可能性．大学と学生．独立行政法人日本学生支援機構．平成20年第54号　通巻528号　p.6-15.

川喜田二郎（1986）．KJ 法　混沌をして語らしめる．中央公論社.

川島啓二（2008）．初年次教育の展開と GP 事業　大学と学生　独立行政法人日本学生支援機構．平成20年第54号　通巻528号 p.24-30.

太田弘一（2010）．初年次教育の意義と課題．教養と教育．愛知教育大学．2010，10，p.41-55.